

---

# 今この瞬間が未練だった

片岡

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

今この瞬間が未練だった

### 【Nコード】

N0621Y

### 【作者名】

片岡

### 【あらすじ】

『彼と過ごす透明な日曜日』のもとになったお話。

タイトルは素敵お題サイト様からお借りしました。

## 境界線崩壊

なんで此処にいるのって聞かれても、困る。僕はなんとなく此処にいるだけなんだから。

下校時間を迎えた学校を見て、そんなことを思ってみた。

正直、僕にも此処にいる理由なんてわからないんだ。だって気付いたら此処にいたんだから。

だからといって自分が死んだことに気が付いていないわけじゃない。未練も無い、はず。

本当に、此処にいる理由がわからないんだ。

生前は学校かったりいなんて思ってたクチなんで学校大好き！って理由で此処に留まっているわけでも、勿論、無い。

ふわふわ、ふわふわ浮きながら正門から学校を出ていこうとした…… ああ、やっぱり出られない。どうしてだろう、僕はいつの間にか定位置      昇降口前に戻ってきていた。

だから、さっきの嘘になるんだな。なんとなく此処にいるんじゃない、出られないのが正解。

ああ、どうして僕は自由になれない？

僕には未練なんてない。

さっさと死後の世界とやらに行かせてくれよ。

一人ぶつぶつ愚痴っていると、不意に、ある女の子に目が止まった。

校舎から慌てて出てきたその子が、やけに気になった。

「……きみ……、」

聞こえるはずもないのに、僕はその子に話し掛けていた。聞こえるはずがない、のに。

「え………?」

「………!」

視線が、ゆつくりと交わった。

パリン、だなんて、境界線の砕け散る音が聞こえた気が、した。

境界線崩壊

（生死の境界線は壊れました）

## 温度を失くした

「僕が……、見えるのか……？」

「……………」

彼女は僕の問いに戸惑いがちに頷いた。

そりゃあそうだろう。彼女は、多分、僕のことを生身の人間だと思ってる。

暗くなり始めた少し不気味な校舎を背に、いきなり（制服を着ているとはいえ）見知らぬ男に話しかけられて、意味不明なことを訊ねられたんだ。僕がその立場にいてもそいつを怪しむ。

そんなことはわかっていた。

だけど、

「……………」

だけど、そんなこと気にしてられないくらい、今の僕は興奮していた。

だって、だって初めてなんだ。僕が死んでから、僕に気付いてくれた人は。

「あの……、誰ですか？そのネクタイの色、私の先輩……ですよね

「？」

僕の学校は生徒がどの学年か一目ですぐわかるよう、学園別でネクタイの色を変えている。

しかし、先輩……？

……ああ、そうか。また巡ったのか。僕は高一で死んだ。学年色は緑。

そっか。今年は赤が一年生で緑が三年生か。

「ああ……、えっと、うん。そんなところかな」

正確に言えば、人生の先輩って感じだけど。なんだか煮え切らない返事を返した僕に、彼女はやっぱり訝しむ顔を崩さない。

「芽衣<sup>めい</sup>ー！待ってよ、置いてかないで！」

暫く見つめ合っていると、彼女の友人と思しき少女が駆けてきた。彼女は、メイというのか。

「あ、ねえ、奈々。この先輩、知ってる？私、見たことないんだけど……、」

彼女は小声でナナちゃん？に話しかける。が、死んでから何故か

異様に発達した僕の聴覚では丸聞こえだ。

ナナちゃんは不思議そうに首を傾げ、虚空を見つめた。  
残念、そっちに僕はいないんだな。

「……芽衣、何言ってるの？誰もいないじゃない。  
変なこと言わないでよお！もうっ！怖いじゃん！」

「っえ、……？」

暫し硬直していた彼女だったが、すぐに口を開いた。

「な、奈々こそ何言ってる……！」

「無駄だよ」

会話中に割って入るのはなんだか緊張するけど、僕は敢えてメイちゃんに話しかけた。

すぐに僕のほうに振り向いたメイちゃんに、ナナちゃんが吃驚した顔をする。

「ナナちゃんに、僕の姿は見えないし、声すら聞こえやしない」

手を差し伸べると、困惑しながらもメイちゃんは素直に僕の手を握ってくれた。

温度を失くした僕の手の感触に、少し気持ちが悪そうにしていたメイちゃんだけれど、次の僕の言葉に目を見開いて、掠れた声を吐

き出した。

「だって、僕は死んでるから」

温度を失くした

（この手に触れられるのは一瞬だけ）



## 温度を失くした（後書き）

色々矛盾点が見えてもあまり突っ込まないでやって下さい

僕越しの景色は綺麗か

「…………あの、」

「一人で喋ってる変な人だと思われるよ」

「っぐ…………！」

僕の言葉に彼女は妙な呻き声を上げて押し黙った、

まあ、現に通り過ぎる買い物帰りのおばさんとかが怪訝そうな顔でメイちゃんを見ていたから黙るしかなかったんだろうけど。

学校は薄暗かったけど、帰り道は夕日が射して少し明るい。

夕日のせいで赤みを差した顔でメイちゃんは僕をじりと睨むように見上げた。

「あなたが、」

「あ、あの人、メイちゃんのことすっごく見てるよ。怪しまれてるんじゃない？」

そう言うときメイちゃんはパツと顔を前に戻して、独り言のように僕に話し掛けた。

「あなたが幽霊だっていうのは、わかりました。それはわかったけど、どうして私についてくるんですか…………？」

声から隠しきれない嫌悪感が溢れ出ている。

失礼な子だな、なんて思いながらその問いに答えた。

「さあ、知らない」

「知らないって……、自分のことじゃないですか……」。

はっ！もしかして私、とり憑かれた！！？」

「んなわけない、ない」

パシン、と思い切り頭を叩いてやった。本当に失礼な子だな、この子。

結構痛かったのか、メイちゃんは涙目になって僕を睨んだ。

「僕にだって、人を選ぶ権利はあると思わないか？とり憑くんならもっと可愛い子選ぶって」

「喧嘩売ってんですか……？」

「いうか、ならどうして私についてくるんですか！」

「だから、ついてきてるんじゃないくて、引き摺られてるんだよ、君に」

見て、と地面を指差す。メイちゃんは酷く驚いたらしく、ヒッ、と小さな悲鳴を上げていた。

僕の指が指す先では、メイちゃんのは影と僕の身体（魂、と言ったほうが良いだろうか？）が一部、一体となっていた。

「っな、なにっ、これ！や……やだ、やだ！」

「そんなに怯えられるとさすがに傷付くなあ……」

つか、僕のほうが泣きたい。

なんだってこんな子についていかなくちゃならないんだか。だって、この子面倒臭そう。

パニックを起こす彼女をなんとか宥めすかして帰路を急ぐ。もう辺りはすっかり闇に包まれてしまった。

「……………」

さつきから、メイちゃんは全く話さなくなってしまった。気まずい沈黙を破って、僕は敢えて口を開いた。

「僕さ、半透明だろう」

「……そうだね」

何をいきなり、とでも言いたげな彼女の前に回り、目を合わせた。頬に触れると、一瞬重なった感触が伝わり、すぐにすり抜ける。驚きにメイちゃんは硬直した。

「っ、」

「僕を通して見る景色は、綺麗？」

「……わかんないよ、そんなの」

「うん、ごめん」

いつの間にかとれた敬語は警戒を緩めてくれたのか、それとも敬語を使うに値する存在ではないと思われたのか。

どちらかなんて、わからないけれど、でも、それでも、もう少しだけこの優しい雰囲気に含まれていたかった。

僕越しの景色は綺麗か

（濁ってみえたいつもの、いつもと違う景色）

## 行方不明の心音

どうやら、メイちゃんは僕がいる生活に最近やっとな慣れてきたようだ。

慣れる、というよちも僕にもメイちゃんにもどうしようもないことだから諦めた、っていうほうが正しいのかもしれないけど。

今日も無事に一日が終わり、メイちゃんと一緒にメイちゃんの家に戻る。

メイちゃんは自室に入るなり機嫌が悪そうに僕を見た。

「あのさあ……、学校にいるときに話し掛けるのやめてよ。反応しちゃって、また友達に変な目で見られたんだからね。」

……って、知ってるか。ずっと傍にいたんだから」

メイちゃんは“ずっと”という言葉を自棄に強調した。

うーん、今日は本当に機嫌が悪そうだ。だけど、僕も伊達にメイちゃんと過ごしてきていない。

メイちゃんが馬鹿みたいにお人好しだっていうのはわかっている。

「ごめん、ごめん。なんかさ、まだ死んだっていう実感がないんだよね……。」

なんだか、こうしてメイちゃんと話せるから、自分がまだ生きてる

ような気がして……。  
「可笑しいね、ごめんね」

眉を下げて、もう一度申し訳なさそうに「ごめんと謝ると、ほら、君は僕よりももっと申し訳なさそうな顔で謝るんだ。」

「ご……ごめん……。なんか、無神経だった」

「ほんとメイちゃんって扱いやすいよね」

「なっ……。！ま、また騙したわね！？」

メイちゃんは顔を真っ赤にして僕を怒鳴りつけた。でも、今度はそんなに怒っていないみたいで、すぐに話し掛けてきた。

「ねえ、」

「なに？」

「……………」

メイちゃんは黙り込んだ。

馬鹿だなあ、今更気を遣うことなんて何もないのに。

つくづく人を思いやるメイちゃんがなんだか可笑的い。

「言いづらいこと？別に良いよ。死因を訊かれようが何されようが、今更傷付かないから」

「…………じゃあ、さ……、あんたってさ、…………その、死んでるわけ、

でしょ？」  
「そうだね」

特に変わった様子もなく普通に返事をした僕にやっと安心したらしい。さっきまでの何処かおどおどした口調は消え、いつものように話し始めた。

「心臓の音って、聞こえるの？」  
「……え？」

思ってもみないことを訊かれた。  
当たり前だ。誰が幽霊に“心臓の音するの？”なんて訊くんのだ。  
……メイちゃんか。

「さあ……、聞いてみる？」  
「良いの？」  
「うん」

そう言つと、メイちゃんは僕の胸の辺りに頭をくつつけて（と言っても本当にくつつけたら通り抜けちゃうから少し浮かせた感じで）耳を澄ませた。

それから、何も言わなくなってしまったメイちゃんが気になって、今度は僕から話しかけてみた。



「聞こえた？」

「……………冷たい」

「、うん」

僕の質問には答えず、メイちゃんはそれだけを口にした。  
やがて女の子らしい細い肩が震え出し、途切れ途切れに嗚咽が。

「っ何、も……………何も聞こえないよお……………っ……………！」  
「そっかあ」

何もメイちゃんが泣くことは無いだろう。

本当に、お人好しだな。

行方不明の心音

（耳を当ててもからっぽな心臓は）

## 繋ぐ手はない

「ねえ、今日、日曜だし、何処か遊びに行こうよ」  
「は……？」

いきなり何を言い出すんだろっ、この子は……。

「えっと……、メイちゃんって、もしかして友達いないの？」  
「いるよー！失礼な！」  
「じゃあ、僕なんかじゃなくて生身の子と遊べば良いのに……。」  
「……あー、氣い遣ってくれてるとか？」

すると、メイちゃんは僕をキッと睨みつけた。

「私があんたと遊びたいから誘ってんの！良いから行くよ！」

そう言うつと（最初から僕が何を言おうと行くと決めていたらしい）既に身支度を終えていたメイちゃんは部屋のドアを開け放ち駆け出した。

僕とメイちゃんは繋がっているの、僕に行く気がなかつと僕は行くはめになる。

どうやら一体化してしまったら主導権は生身の人間にあるらしく、幽霊である僕は基本的には逆らえない。

「良い天気だねーっ」

「そうだねー……」

……あのさあ、なんで公園？」

真っ青な空。白い雲。暖かな陽射しをくれる太陽に、古びて色褪せた幾つかの遊具。

メイちゃんの言う通り、こんなにも良い天気だったのに、公園で遊んでいる子供は一人もない。

それは、まだ九時という微妙な時間帯だからか、それとただ単にこの公園が寂れているだけなのか。

……多分、後者なのだろう。最近の子供は、外で遊ぶよりゲームだから。

誰にも使われなくなつて久しい滑り台には蜘蛛の巣が張っていた。人間の自分勝手な都合で作られたこの公園と遊具たちは、またしても人間の自分勝手な都合で消え逝くのだろう。

こういったものを見ると、自分の姿を重ねてしまい、酷く寂しい気持ちになる。

「別に、人がいなさそうな場所って考えて、此处が一番出てきただけ」

「ふうん、そっか」

メイちゃんは懐かしそうに目を細めてペンキが剥がれかけたベンチに腰かけた。足をぶらぶらとさせて、何処か遠くを見つめている。

「私が小さい頃、この公園でよく遊んでたんだよ」

「そうなんだ」

「うん。でも、小さい頃の話」

メイちゃんはじつと僕の目を見た。僕は、何故だかその視線にどきりとした。

「今じゃもう全然行かなくなっちゃって、思い出しすらなかった」

「つー、と細い指が何度もベンチの背凭れの上を行き来する。その優しい手つきは、まるで愚図り始めてしまった子供を宥めているようだった。」

「昔は人がたくさんいたんだよ。」

「……時ってさ、怖いよね」

全部、変わっていつちゃう。

メイちゃんは寂しそうに呟いた。

その姿が、あんまりにも頼りなさげで、寂しそうで、だからだと思ふ。

だから、僕はおこがましくも実態を持たぬこの手でメイちゃんの手を握ってしまったんだ。

それはすぐにすり抜けてしまったけれど、メイちゃんは少し驚いたように、嬉しそうに笑って言った。

「……ね、もつとぎゅうってして」

一瞬、僕は自分が生きている人間なのではないかと錯覚した。

繋ぐ手はない

(だって、君が優しく笑うから)

地面を忘れたら空に行くから

ブ、ブブ、と虫の羽音のような耳障りな雑音が耳に痛い。

メイちゃんはまだ眠っている。当たり前だ。今は朝の四時なんだから。

少し外が明るくなり始めた。カーテンを開けて、窓に顔と手を近づけてみた。

陽の光に透かしてみると、この手の違和感は強くなる。

「どうして、今頃……」

僕は、望んでない。

「ねえ、名前、なんていうの？」

突然、メイちゃんは僕にそんなことを訊ねた。

鸚鵡おつむ返しに訊く。

「名前？」

「そう。あんたは私の名前知ってるけど、私は知らないなってる」

ああ、そうだな。確かにそりゃ不公平だ。だけど、そう思っても僕には彼女に僕の名前を伝える術がない。

「…… 忘れた」

「……、え？」

聞こえなかった、もしくは僕の言った言葉を信じられなかったのだろう。彼女は短く訊き返した。

「名前、忘れちゃったんだ」

メイちゃんは息を呑んだ。自嘲的に笑って、続ける。

「可笑しいね。死んだ日や原因なんかは覚えてるよ。今から八年前、七月八日に僕はある十字路で交通事故に遭って死んだんだ。

こんな覚えていたくないことは覚えてるのに、自分の名前と両親の顔だけが、どうしても思い出せない」

「……………」

「自分の存在が、思い出せない……………」

なんだか泣いてしまいたくなって、思わず頭を抱え込んだ。メイちゃんの、静かな声が僕のあるはずがない鼓膜を震わせた。

「それは……、悲しいね」

「……僕はさ、どうして此処にいるんだろう？」

メイちゃんは不思議そうに僕を見た。

僕でさえわからないのに、メイちゃんにわかるはずがない。だけど、メイちゃんは必死に頭を捻っていた。

「え、つと……、み、未練がある、から……？」

「違うよ、僕には未練なんてない。

僕、最近思うんだ」

「なに？」

「幽霊つて“未練があるから残る”んじゃないくて、“未練があるから残りたい”んじゃないかって」

「どっちも同じじゃないの？」

「多分、ちよつと違う」

ふーん、とよくわかってなさそうにメイちゃんはおざなりな返事をした。

そして、何かを思いついたように僕を見て、言った。

「あんたは、“未練があるから残りたい”の？」

「未練、無いって」



「あ……、そ、そっか」

「でも、もしかしたら自分でも知らないうちにこの世に未練を持ちちゃってるのかもね」

メイちゃんは何かを考え込むように目を伏せた。とりあえず、何も言わずに待ってみる。

暫くすると、淒く小さな声でメイちゃんは言った。

「じゃあ、それがなくなったら？」

「……<sup>みれん</sup>地面を忘れたら、下に落ちるか、それか上に行くよ」

そう、と寂しそうに呟いたメイちゃんの声が、やけに頭の中に響いた。

地面を忘れたら空に行くから

（忘れたら、それしか僕に出来ることはないだろう？）

繋ぎとめる糸もないのに

例えば、私に彼を繋ぎとめる為の糸があったとしたら、そうすれば彼は此処に留まってくれるのだろうか。

……地面<sup>みれん</sup>を忘れたら、下に落ちるか。それが上に行くよ

落ちるだなんて駄目。のぼっていつてしまうのだって許さない。

幽霊<sup>ゆうれい</sup>って、“未練があるから残る”んじゃないくて、“未練があるから残りたい”んじゃないかって

彼はそう言った。

なら、未練を“残させれば”良い。

忘れることなんて出来ないほどに、強い強い未練を残してしまえば良い。

だって、そうすればあんたはもっと此処に留まってくれるんじゃない？

残ってしまえ。残ってしまえ。

なん、て、繋ぎとめる糸みれんもないのに。

繋ぎとめる糸もないのに  
(だけど、それでも繋いで、離さないでおきたかった)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0621y/>

---

今この瞬間が未練だった

2011年10月31日17時15分発行